



まだ、小室山には
行けない

せとやまゆう



2020年2月15日

アナウンスが何かを伝えている途中で、目が覚めた。おそらく、着陸態勢に入ったのだろう。僕は窓からの景色に目をやった。しばらくライトブルーが続き、グリーン、ペールオレンジ、グレー……。様々な色が出現した。持っているのは財布のみ。仕事を辞め、アパートを退去し、この惑星を訪れた。住んでいる町と同じように、空気と水が存在する。海や山、川も存在する。そして、四季があり、住人がいる。このあたりは、秋には紅葉の名所となるそうだ。しかし、今は冬。木々は枯れ、寒々しい景色が広がっている。宇宙船から降りると、少し向こうに予約したホテルが見えた。歩いて向かう途中、赤い橋を通った。橋の欄干に手を置き、下を覗いてみると、小さく緑色の川が見える。僕はしばらく考えた。ここから飛び降りれば、確実に死ぬだろう。高いところから落ちると、途中で気絶するとよく聞く。しかし、もし気絶しなかった場合はどうなる。恐怖と痛みを味わうことになるだろう。死ぬときくらい、楽に逝きたいのだが……。

「こんにちは」

犬を連れた男性に声をかけられた。

「こんにちは」

僕は小さな声で答えた。

「君が考えていること、わかるよ」

「えっ、何がわかるんですか？」

「君に頼みがある。死ぬ前に、この装置を試してみてくれないか」

男性の手の中には、腕時計らしきものがあった。

「何ですか、これは？」

「名付けて、らくらく消滅くん。私が発明したんだ。腕につけておけば、24時間後に、君は消滅する。

痛みは感じないし、死体も残らない。楽に死ねるよ」

男性はにっこり笑った。しばらく考えて、僕は答えた。

「わかりました。使わせてもらいます」

僕は装置を受け取り、左腕につけてみた。すると、デジタルの数字が浮かび上がって、カウントダウンが始まった。

「一度身に付けると、基本的に外すことはできない。しかし、気が変わることもあるだろう。解除できる呪文を覚えておくよ。マル・・・」

呪文を聞き終える前に、僕は歩き出した。そんなものは必要ない。どうせ、消えるのだから・・・。僕がいなくなつて、悲しむ人なんているのだろうか。いや、いない。それでこそ、心置きなく消滅できるってものだ。

ホテルのフロントでチェックインを済ませ、僕は大浴場に向かった。ヒノキ風呂や樽風呂、露天風呂。

色んな湯船があった。温泉の効能が書かれたボードによると、泉質はカルシウム・ナトリウム硫酸塩泉で美肌効果が高いらしい。夕食は、旬の食材を使った料理。伊勢海老のお造り、金目鯛のしゃぶしゃぶ、伊豆牛の陶板焼き・・・。海の幸、山の幸がたくさん。利き酒セットで、3種類の地酒を堪能した。

「もう、思い残すことは何もない」

僕は布団に寝転がると、すぐに眠りについた。眠りは異常に深く、目を覚ますと翌朝になっていた。朝食をとり、チェックアウト。さて、消滅する場所を決めるとするか。神社や寺院、公園・・・。色んな場所を巡った。しかし、なかなか決まらなかった。とりあえず、目についたカフェへ。

「別に、どこでもいいか」

消えるだけだし、誰かに迷惑をかけるわけでもない。コーヒーを飲んでいて、思い出した。眠っている間、夢を見ていたことを。目線を上に向け、内容を思い出してみる。

僕は制服を着て、教室に座っている。教壇に立っているのは、見たことのない先生。黒板には、数式がずらりと並んでいる。おそらく、数学の時間だろう。少し離れた席には、高校時代に好きだった女の子の姿。その子は美人で、小柄で、ポニーテールがとても似合っていた。しかし、自分のことをかわいいと思っている感じがなく、控えめな雰囲気の人だった。学校の男子たちは、みんな彼女のが好きだったと思う。それくらい、彼女はモテていた。高校時代、僕は友だちが1人もできなくて、辛い日々を過ごした。しかし、彼女に会えると思うと、3年間通うことができた。おそらく、彼女がいなかった

ら、僕はすぐに学校を辞めていただろう。

「今日は、これで終わります」

しばらくすると、授業が終了した。見たことのない先生は去って行った。

「ホームルーム、始めるぞ」

今度は、別の先生が教室に入ってきた。僕が中学3年生のときの担任の先生だ。教科は社会。おもしろい話を交えながら、興味深い授業を展開してくれた。そんな先生が、僕は大好きだった。卒業式の日、先生はクラスの生徒全員に言葉を贈ってくれた。

「自分の道を、静かに進んで行ってください」

そんなことを思い出しているうちに、急に彼らに会いたくなかった。死ねない、死にたくない。僕はまだ、2人に感謝の言葉を伝えていない。今、彼らはどこで何をしているのだろう。そんなこと、見当もつかない。でも、会って一言だけ伝えたい。「ありがとう」と。とりあえず、住んでいる惑星に戻らなくては……。僕は宇宙船に向けて駆け出した。左腕の装置に目をやると、残り時間は7分19秒だった。もうすぐ、僕は消滅してしまう。とうてい、2人を探し出すなんて不可能だろう。そうだ、解除の呪文……。脳内の記憶を辿ってみたが、思い出せなかった。あの時、ちゃんと聞いておけばよかった。あの男性に会いに行くしかない。僕は方向を変更し、赤い橋へと走り出した。

懸命に走り続け、ようやく橋に到着した。残り時間は1分48秒。しかし、そこに男性の姿はなかつ

た。

「はあ、はあ。やはりダメだったか・・・」

しゃがみ込んで途方に暮れていると、犬が近づいてきた。小学生くらいの女の子が、リードを握っている。

「こんにちは」

犬の頭を撫でながら、僕は言った。

「こんにちは」

女の子は、少し恥ずかしそうに言った。

「かわいいね、犬種は何？」

「マルチーズ」

「へえ、マルチーズかあ」

その瞬間、装置が解除された。

というようなことが、このページには書かれている。

「あのときは、命拾いしたなあ」

車内の広告を見つめながら、僕はつぶやいた。現在、時刻は17時36分。到着には、まだ時間がかか

るようだ。日記帳を一度閉じ、適当なところで開いてみた。

2022年2月18日

帰省という言葉は、誰かに会うという意味で使われることが多いかもしれない。家族や友人、親戚、お世話になった人など……。僕の場合は、誰にも会わない。宇宙船に乗って、故郷に行くだけだ。思いの場所や行きたい場所を訪ねて、すぐに帰る。連絡をとっている人はいない。実家に帰ることもない。実家はない。どこかにあるかもしれないけれど、もう家族関係は終了している。色んな問題が生じたからだ。誰のせいでもない。僕は解決しようと悩み、抱え込み、自分を責めたりした。そして、心が凍り付いた。後になってわかったが、どうすることもできない問題だった。世の中には、解決しなくていいこともある。

生まれ育った故郷のことは好きだった。一生、離れることはないだろうと思っていた。しかし、次第にその気持ちが薄れ、住んでいるのが苦痛になった。いつそのこと消えてしまいたいと思うこともあった。環境を変えるため、この惑星への移住を決意。勤めていた職場も好きだった。遠くても、通勤しようかなと思ったほど。だから、去るのが辛かった。旅立ちの日、たくさん同僚が駆けつけてくれた。明るく送り出す人、別れを悲しむ人、今後のことを思ってアドバイスをくれる人……。僕の日からは涙がこぼれ、なかなか止まらなかった。くしゃくしゃの顔のまま、宇宙船に乗り込んだ。

こうして、新しい惑星での第二の人生がスタート。よく遊びに来ていた場所だったけれど、住むとなれば話はちがう。最初は慣れないし、大変だった。それから2年が経過。新しい出会いが、少しずつ僕の心を溶かしてくれた。今では、この惑星が大好き。豊かな自然、珍しい生物、ゆっくりと進む時間……。色んなことに感謝しながら、生活している。何不自由なく暮らしていたら、きつと見落としていただろう。

そして、気づいたことがある。最近、故郷を好きな気持ちを取り戻し始めている。「また、住みたいな」と思う日が、いつか来るかもしれない。素直な気持ちを取り戻したなら、器の大きい故郷のことだ。優しく、抱きしめてくれるはず。そして、僕は熱い涙を流すのだろう。

そういえば、あの日はいつだったかな……。パラパラとページを捲ってみる。
「あった」

読みながら、当時のことを思い返す。

2022年4月27日

大人になってこの場所を訪ねたのは、今日が初めて。子どもの頃に住んでいた時期があるから、ある程度の土地勘はある。バスを降りて、少し歩く。昔住んでいた場所は、広い道路に変わっていた。到着

したのは、老舗の茶屋。清潔感あふれる店内には、いい香りが漂っている。僕はメニュー表をじっと見つめた。たくさんの種類のお茶がある。元気になる煎茶、リラックスぐり茶、幸運を呼ぶ桑葉茶、勇気が出るほうじ茶……。どれにしようかなあ。しばらく考えて、僕はお茶と最中をテイクアウトした。店を出て、目の前にある公園へ。今の季節はツツジが満開。赤、ピンク、紫、紅。色とりどり咲き誇っている。心地よい風が、新緑の匂いを連れてくる。つつじのトンネルを抜け、レストハウスへ。オレンジ色のリフトが、僕の身体を上空へと誘ってくれる。山頂に着いて、ループ状の木製遊歩道を歩いた。東は相模湾、真鶴半島。西は大室山、天城連山。北は富士山、伊東市街。南は伊豆大島、利島。360度パノラマが広がっている。海のほうへ突き出した展望デッキには、ベンチが3つあって、すべて空いていた。真ん中のベンチに座り、景色を楽しむ。ゆっくりと流れる時間。

「いい眺めだなあ」

最中を食べて、お茶を飲む。至福のひとつとき。僕が選んだのは、幸運を呼ぶ桑葉茶。渋みが少なく、爽やかな味わい。こんなのにのんびりするの、久しぶりだ。物思いにふけていると、女性に声をかけられた。

「あのう、となり座ってもいいですか？」

「あつ、はい。別に、いいですけど……」

僕は他のベンチに目をやった。すべて埋まっている。さっきまで、誰もいなかったのに。くつろぎす

ぎて、気づかなかったのだろう。ちょっと、長居しすぎたみたいだ。ここは、みんなの公園。彼女に席を譲って、立ち去ろう。しかし、話していくうちに、知り合いだということがわかった。ずっと、会いたいと思っていた人。びっくりして、ドキドキした。再会できるなんて、夢にも思っていなかったから。

彼女と出会ったのは、小学3年生のとき。一目見て、かわいいと思った。4年生になったあたりから、僕は彼女のが好きだったと思う。無意識に、目で追ってしまう。初めての感覚に、戸惑ったのを覚えてる。5・6年生はクラスがちがった。中学生になって、同じクラスになった。となりの席になることもあって、とても嬉しかった。「もつと、彼女のことを知りたい。たくさん話して、仲良くなりたい」と思っていた。そんな矢先、僕はちがう町の学校に転校した。親の仕事の関係で。それ以来、会うことはなかった。時間が経つにつれ、当時の記憶は薄れていく。しかし、彼女のことだけは鮮明に覚えている。かわいい仕草に、ドキドキ。言葉を交わして、ワクワク。ずっと、好きだった。いいイメージしかない。思い出すたびに、僕の心は穏やかになる。彼女は、今どこで何をしているのだろう・・・。元気にしていたらいいな。そう思っていた。

今も変わらず、彼女は素敵だった。優しく、落ち着きのある話し方。見た目も、ドストライク。「えっと・・・。3・4年生のとき、同じクラスだったよね」

記憶をたどりながら、彼女は言った。

「うん。一緒に、学級委員をやったことあるもんね」

うなずきながら、僕は答えた。

「そうだったっけ？」

「覚えてないよね。僕は覚えてるよ、初恋の人だから。忘れてたくても、忘れられない」

彼女は頬を赤らめた。急に、僕も恥ずかしくなってきた。

「えっと、あの・・・。子どもの頃も、そんな髪型だったよね」

「うん、そうだね。こういう感じが多かったかも」

「ショートカット、似合うね」

「えー、ありがとう。ちがう髪型にすることもあるよ」

「例えば、どんな？」

「ひとつ結びとか、おだんごとか」

「わー、絶対似合うじゃん」

「そんなことないよー。あっ、そのお茶屋さん」

彼女は、僕が持っているプラスチックのカップを指さした。

「私も、よく行くんだ。昨日も飲んだよ」

「へえ、そうなんだ。ちなみに、昨日は何を飲んだの？」

「思い出す抹茶ラテ。ここは、私にとって大切な場所。最近、来てなかったなって思った。だから、久

しぶりに来てみたんだ」

「そうだったんだね」

なるほど、お茶が二人を再会させてくれたのか・・・。

「この公園、昔はなかったよね」

「うん、少し前にできたんだ。あの頃の人たちとは、全然会ってないかも」

「僕も、全然会ってない」

「同級生に会えて、嬉しい」

「僕も嬉しい」

それから、しばらく話をした。冗談を言って笑い合う、楽しい時間。青春を取り戻したみたいで、嬉しい気持ちになった。

「ねえ、この公園の魔法って、知ってる？」

「ううん、知らない」

「じゃあ、この公園で花火大会があることは？」

「それは知ってる。けっこうにぎわうみたいだね」

「花火のラスト1分間、あることをすれば1つだけ願いが叶うの」

「うそだー」

「本当だよ。だって、私叶ったもん」

「えっ、どんな願い？」

「それは内緒」

「ふうん。で、どうやればいいの？」

彼女は方法を詳しく教えてくれた。ギギギギ……。金属が軋む音がして、からくり時計が作動した。

17時を告げる合図だ。

「えっ、もうこんな時間？」

「あっという間に、時間が過ぎたね」

「私、行かなくちゃ。予定があっただ」

「僕も戻って、持ち帰った仕事をしなきゃ」

「じゃあ、元気でね」

「うん、元気で」

こうして、僕たちは手を振って別れた。連絡先は聞けなかった。勇気が出るほうじ茶も、飲んでおけばよかったかな。

あの日以来、様子がおかしい。彼女のことを思い出すたびに、フワフワ。数センチだけど、身体が宙に浮いてしまう。こうなると、歩きづらい。地に足が着いていないから。思考を切り替え、起きている

出来事だけに集中する。

「今、僕は宙に浮いているね」

すると、元に戻る。また、会いたいなあ。あの場所に行けば、会えたりして……。淡い期待が頭をよぎるたびに、ドキドキ。でも、そう思えば思うほど行けない。身体が宙に浮いてしまうから。この症状が落ち着いたら、また行こう。地球上で、会いたい人と偶然再会できる確率は……。調べてはいないが、かなり低いと思う。そう考えると、再会できただけでもこの上ない幸運。彼女がいる。それだけで、あの町が特別な場所に思える。

日記帳を閉じ、公園中央バス停で下車。レストハウスを通り過ぎ、ジュラシックコースの看板が案内する登山道へ。ゆつくりと、太陽が西の方角へと落ちていく。それを横目に、舗装された小道を進む。生暖かい風が茶畑と芝生の匂いを織り交ぜ、夏らしい雰囲気を漂わせている。10分ほど歩いて、恐竜広場に到着。友だちとはしゃいでいる子どもたち、家族連れ、カップル、浴衣を着た女性……。すでに、たくさんの方が集まっている。ステージの横には出店が並び、特別な夜を演出している。ヨーヨー、お好み焼き、からあげ、焼き鳥、わたあめ、かき氷……。太陽が姿を消すと、急に周囲の山々が重厚感を増した。しかし、月明りが安心感を与えてくれる。ドーン。上空めがけて、最初の一発が解き放たれた。牡丹、菊、冠、ハート、スマイル、柳、ナイアガラ、惑星……。大きな音が鳴り響いているが、

三日月は平気な顔をしている。花火師、イベント運営スタッフの情熱。たくさんのお思いが込められた、夜の花。笑顔になる人、勇気をもたらす人、嬉しくて涙を流す人。そんな情景が目に見えかぶ。空を見上げながら、恋人たちは何を語り合うのだろう……。告白しようと考えている人も、いるかもしれない。「そろそろかな」

僕は登山道をさらに進んだ。しばらく歩き続けて、山頂の展望デッキに辿り着いた。ベンチに座りたかったが、あいにくすべて埋まっていた。僕は彼女が言った言葉を思い出した。

「このベンチに来て、心の中で願い事をするの」

「先客がいて座れないときは、どうすればいい？」

「立ったまま、願い事をすれば大丈夫。この周辺なら、魔法の力が届くから……」

時計の時刻は 19 時 59 分。僕は静かに目を閉じて、彼女の姿を思い浮かべた。まじめで誠実なところが好き。優しく思いやりがあるところが好き。大切にしたい。守りたい。笑顔にしたい。いつでも、僕は君の味方。好きな気持ちは、誰にも負けない。どんな状況でも、気持ちを届かせる。同じ時代に生まれてくれたこと、同級生として出会ってくれたこと、この場所で再会してくれたこと、本当にありがとう。もしまた会えたなら、恥ずかしがらずに僕は言う。今でも、君のことが大好きだってこと。いつも、君の幸せを願っている。ドンドン。連射連発スターマイン。ドンドンドンドンドンドン。

夜空が静寂さを取り戻し、少しずつ観客が減っていった。帰路につこうとしたそのとき。
「高橋くん？」

背後から、女性の声がした。

まだ、^{こむろやま}小室山^いには行けない

2023年10月28日 発行

著者 せとやまゆう

町制施行60周年・かんなみ知恵の和館10周年記念事業冊子

発行 函南町教育委員会

製本 函南町教育委員会生涯学習課（函南町立図書館）

電話番号 055-979-8700

419-0122 静岡県田方郡函南町上沢107番地の1

当作品について転載・複製・複写・翻訳を著作者の許可なしに行うことを固く禁じます。

（著作権法上での例外を除く。）また、個人や家庭内の利用であっても、代行業者等の第三者に依頼して無断でスキャン及びデジタル化することはできません。

作品の著作権は著作者に帰属しますが、函南町立図書館は作品を永続的に無償で使えるものとし、主に公開にあたっての編集、印刷、配布、掲載に関する事柄を。ただし、当館は著作者の創作性を重視し、作品内容には関与しないものとし、

日記を読み返している
一人の男性。かつて宇宙
船で伊豆へと行き着いた
彼が、過去を振り返りつ
つ向かう先とは……。
伊豆の景色と思い出、
心情が交差する物語。

